

一、夫婦関係の教育力

1 現代の親子関係（二人の母親）

筆者は今、長年の念願になって、庭つき一戸建てを建築中である。大工さんは、もうすぐ四十に手のとどくころの、まさに働き盛りであるが、こまめによく説明しながら、大変熱っぽく建ててくれている。そこでつい、感謝の気持ちもあつて、「いちど、夜飲みにいきましようか」といつてしまった。お酒好きのようでもあったから、まさか断られるとは思ってもしなかったのに、「俺、家に帰って、子どもを風呂に入れるのが日課になっているから」という返事が、即座に返って来た。あつ、そりゃそうだ、と思わず知らず、つまらぬ誘いをかけた我が身を恥じた。

かくいう私も、子どもが小学校に入るまでは、二人の子どもを入浴させる、否、一緒に入浴するのが日課であった。余程やらねばならぬ緊急の仕事がない限り、毎日毎日、それはもう、無上のたのしみといつてもよく、きゃあきゃあ悲鳴をあげる子どもの頭にセッケンをぬ

りたくり、じゃぶじゃぶと湯をかける快感はほかに味わいようのないものだった。下の子（女兒）は大切に抱いて入れたから取り落とすなどということはなかったが、上の子（男児）は元気がよすぎたせいもあったのか、どういうわけか、赤子のとき、何回か湯船のなかに落としてしまった。しかし、まだ立てないはずの幼いわが子が、驚愕して湯船の底を蹴って飛び上がってくる。その様は、まるで海坊主。いつまでも昨日のこのように思い出される、抱腹絶倒のシーンである。海坊主は、長じるにつれて泳ぎを好み、大学生になった今年、水泳部に入ったが、これに関しては、父たる私になにほどの貢献があるのではあるまいか。

下の子も今では高校3年生、「この世の中でオヤジが一番大嫌い」などという年ごろかもしれないのに、それをとくに短く終えて、バカ親ぶりを満喫させてくれる孝行娘である。なんとなれば、「（父）チャンの弁当は世界一」といって、たまさか寝過ごして二重底のノリ弁を作り損ねようものなら、「チャンなんて、大嫌い、あたしのことなんて、どうだっていいんだ」と大いにふくれてみせてくれるからである。しかし、この子を見送る朝の儀式は大変である。私たちはさるマンションの5階に住んでいるが、私の娘は御機嫌がよいと、玄関を出てからエレベーターの前に着いて一回目、マンションの出口で二回目、マンションの前を道を通ったところで三回目、そこからまっすぐ行って曲がる所で四回目、そして最後は見送る私が見えなくなる駐車場のところで五回目、と最低五回は振り返って、父親に手を振るのである。応える側としては、初めは手を上げるだけでよかったが、長年のうち、何回もの

ごあいさつともなれば、ただただ手を上げるだけでは何とも芸がなく、また誠意がないように思われて、Vサインが出、それが両手になり、次にはグルグル回し、と次第に「振り」が派手になり、大げさになっていく。今では、ディスコ風に身体を揺すったり、足さえ上げて、しばしの別れの挨拶とすることもある。

私が二人の子どもを見送るようになったのはいつ頃からであろうか。もう思い出せない。この間、母親たる妻は朝食を取る暇とてなく、夫子どもの食後の後始末もそこそこに、そのあと慌ただしく出勤していく。これが、我が家の、うわべは単調なここの十幾年の毎日ではある。子どもたちは、いつかな母親から見送られるということはないものと、ごくごく自然に受け止めているようであった。

今春、上の子が我が家(東京)を離れて、関西の大学に行くことになった。息子は丁度、毎朝出かける時間と同じころに、またひよいと出かける風に、駅まで荷物を運ぶ私と一緒に家を出た。妻はさりげなくいつもの調子で、とはいっても、時々すこし手が空けられるときにするように、玄関口まで追ってきて、「新幹線なら僅か3時間よ、じゃ、いつてらっしゃい」と言って、特別に惜別の情を示す風でもなかった。私たちは玄関を出てすぐに、扉が閉められる音を背中で聞いた様に思った。

息子と私は、3ヶ月後の引っ越しの打ち合わせなどしながら、何事もないかのように、普段と全く変わることなく、決まり切った駅への道を歩いていく。ふと、息子が立ち止まって、

振り返った。そこは、いつも娘が最後に手を振って消えてゆく駐車場のところである。百米ほど彼方マンションの我が家の玄関口に、彼の母親が立っているではないか。しかし、母と子は、全くいつもそうし合っているかのように、互いに軽く手を振り合っただけですぐに視界から消えていった。「珍しいねえ、お母さんが・・・」とひと言洩らしながら、息子はぴったりと息のあった母との別れに、一抹の淋しさを抑えながらも、満足そうであった。この息子、ここ二、三年、あれほど無邪気に喜んでいた父親の見送りには、「恥ずかしいから、やめてくれ」と、めったに振り返ることなどしなかったのだが・・・。

さて、いかにも親バカ然とながなが我が家のエピソードを語ったが、要するに我が家には、例えば「厳父慈母」のように、旧来いわれるような父親らしさ母親らしさといわれるものが存在しない。正確に言えば、親の性に関わりなく、その時々、母性的あるいは父性的に「親」の役割が演じられているだけである。こうしてむしろ、母親に子どもたちと睦み合う時間のないことをよいことに、勝手なときにべたべたと子どもに纏わりついて「母性的」な親の役割を演じているのが私、即ち、少なからぬ現代の父親たちの姿なのである。

近年、母性化した父親族が多くなった背景には、子ども数の減少、母親の就労、これらの結果としての父親のマイホーム化、教育パパ化・・・と様々な要因があげられよう。が、いずれにしろ、いったん培われた母性化は「叱らないがこわいお父さん」、「どこかでじっと見守っていてくれるお父さん」といった男性的な父親像を減少させ、ひとり我が家に留まら

ず、「家にはお母さんが二人いる」という一般的な現象を生むに至っている。

2 教育力のある夫婦関係（一体性・相補性）

子どもを育てる、あるいは子どもが育つには、親の側に明確な性の役割と原理がなくてはならないと言われる。即ち、父親には男性性と父性原理が、母親には女性性と母性原理が求められる。特に、女性性と母性の横溢する昨今では、父親による男性的な父性の回復こそ、子どもの性役割と社会性の育成に関わる根幹的な問題だとされている。はたして、そうだろうか。

確かに、“厳父慈母”といった一昔前の対比・対照的な親のあり方は、子どもの性役割の学習や社会性の育成など、さまざまな面に教育力を発揮する。しかし、それは、そうした個々の親のあり方（厳父・慈母）が個別に力を持っているというより、むしろ、個々には欠けた面をもつ親のあり方がたまたま対比・対照効果によって互いに目立ちまたバランスよく他方を補い合い、それによって、性役割を学習しやすくし、また教育力をもたせるのである。けれど、その一方だけでは、けっして大きな力を持つことはなく、時にはかえって、悪効果さえ生む。厳しいだけならば萎縮し、優しいだけならばわがままになるのは、まだ未熟で未発達な子どもであれば、理の当然のことなのである。

厳しさと優しさが教育の二本柱であることは、疑いの余地がない。特に、優しさと、優しさに裏打ちされた厳しさが一方に偏することなく調和的に併存することが理想的である。しかし、よほど完成された人でなければ、両者をバランスよく身につけるということは、至難である。こういうことがどれほど必要であるかを十分わきまえているはずの専門家たる教師たちでさえ、ほとんどは身につけることに失敗している。さすれば、凡夫凡婦の、まして凡父凡母の私たちであれば、力を合わせて、これらを併せ持つべく努力する以外に道がない。こう考えると、厳父慈母とは、人間がいかに完全でないかを見通した上での、欠けた者同士を結びつける最良の組み合わせであったことに気づく。私たちはこれをモデルに、教育力という観点から、夫婦関係のあり方を考えてみなければならぬだろう。

力を合わせるとは、異なる者同士が一体化し、足りないところを補い合わせることである。「厳父慈母」がまさしくそれであった。しかし、「二人の母親」家庭のように、同質のものがただ力を合わせるだけでは、補い合うところがない。それどころか、互いに優しさを競い合って、単に子どもを甘やかすの愚に陥り、「優しさ」という最良の武器を砂糖で塗りたくり、溶かし、変質させることになる。優しさは、厳しさを伴って初めて有効な教育力となることを常に銘記すべきである。

ここまで、単に「優しさ」とか「厳しさ」とか述べてきた。ここでそれらを定義づければ、優しさとは「相手の全人格を受け入れる『情愛』」であり、厳しさとは「善悪の判断を示す

「けじめ」である。こう考えると、優しさといい、厳しさといい、けっして男性性とか女性性、あるいは父性とか母性とかいった特定の性や役割に付与される特別な特性ではないことが明らかになる。これらはいわば、私たちが基本的に備えていなければならない人間性そのもののなのである。そこで私たち親は、性別や役割に関わりなくこの基本的な人間性を持つべく努力し、互いに足らざるところを、それを補うべく行なえばよい。これは、親がどのようなタイプの組合わせでも同じである。もし一方が厳しさに偏れば優しさで補い、逆に優しさに偏って子どもが甘えに過ぎれば厳しさで律する。このように、両親が一体となって補い合うところに、即ちその一体性・相補性という関係性の中に、夫婦を一単位とする教育力が生まれるのである。

しかしながら、一体性・相補性といっても、それはあくまでも言葉の上のことであり、実現するのはなかなか難しい。表面的、つけ刃的なものだと、逆効果になることも少なくない。例えば、いがみ合っている父と子が格闘になったとする。仲に入った母親がもし父親と一体化して息子の非をなじるなら息子の心は母親からも離れていくだろうし、逆に息子に味方して夫を咎めるならば、息子は父親にいつそう逆らうようになるかもしれない。かつて、親子げんかをとめに入った母親が息子をかばって横暴な父親を非難したことから、かえって息子が逆上し、父親を半殺しにするという事件があった。それでは、どのような関係であれば、夫婦の一体性と相補性を実現できるのか。ここでまたしても我が家のエピソードを掲げる愚

をお許しただきたい。

息子が高校一年のときだったろうか、なにかのはずみで（というより、父親即ち私の権力的態度が原因で）口論になり、私が頬を張ったのがきっかけに、取っ組み合いの大喧嘩になったことがある。非は十分私の方にあったが、親の威厳にかけても謝れないと思った私は格闘を終えてからの言い争いの中でも、また息子の頬を張った。息子は、口惜しさと屈辱で泣いた。そして、終始黙って見詰めていた母親に向かって、父親の無法をなじった。しかし、その無益さを知って、彼はすぐにそれを止める。このようなとき、母親がけっして口をはさまないことを知っていたからである。こうして、親子三人それぞれの思いを胸に、ひたすら黙り込んだ……。思い出しても胸苦しくなるその時の情景である。

これほどの争いはあとにも先にもこれきりだが、しかし、私たち親子の間で幾度か激しい対立が生じている。その時に子どもたちは、いかに無理解で無法な親であるかをもう一方の親に向けて訴える。しかし、私たちの常として、親子げんかには介入しない。何故なら、親は一心同体で子どもの教育に当たっているからである。たとえ一方の親が間違ったことをしていると思っても、それは同時に今、同じ考えで自分がしているのと同じである。いちいち口出ししたり、かばいだてしたりすれば、分裂したぶざまな親の姿を見せることになり、また子どもを甘やかすことにもなる。あとでこっそり慰めることはあっても、その場で中途半端な介入はしない。このときの妻もそうであった。どれほど経ったか分からない。堪えてい

た息子が、無念さで再び咽び泣いた。このとき初めて、妻が口を開いた。「泣くことはないじゃないの」

これは、同じ親として一心同体の父親をこの場で直接責めることはできないが、しかし、別個の独立した母親としての良心が言わせる、精一杯の息子への詫びであり、支持であり、また夫への痛烈な批判であった。いわば妻は、この一言で「けじめ」をつけたのである。これによって、私も救われ、心の中では息子に詫びていた。それでも息子の方はまだ我慢できないようであったが、やがて気を取り直して去っていった。

我が家の子どもたちは、良いも悪いも、親の結束を認めている。それは、すでに述べたように、いつも矛盾や分裂のないように対峙してきたということもあるが、常日頃から共働き家庭にとつて必然的な家事万端の協力、職場での苦労や心労を語り合い慰め合う姿、睡い眼をこすつての書類・原稿整理の手伝い等々、日常的に協力し助け合う姿の中に、さらには、争つて後に和する有様の中にも、夫婦という絆が結ばれていく様を見てきているからである。また私たちは、十二分に子どもたちを愛し、子どもたちも十分にそれを知っているが、それでもなお子どもたちが他方の親の悪口を言ったり、ましてそれによって取り入ろうとするかの気配を見せることがある。そのような場合、時には叱るなどして、私たちはけつしてそれを認めることはしなかった。例えば、母親が宴会で遅くなるとき、当初は母を求める気持ちでつい「女のくせに……。母親なのに……」と不満に口をとがらせたものだが、それには「宴

会も仕事のうち、それに、家事から開放されて疲れをとる最良の機会」だと教えてきた。今では、親が飲んでくるといえば、明日への活力を養うために楽しく酔ってきて欲しいと願うようになってくれている。

さて、教育力を持つ夫婦の関係、即ちその一体性・相補性とは、事に当たっての子どもに対する一過的・場当たりの態度や関係ではなく、日常的・継続的な関係性そのものを言う。この関係性こそが、もちろんその時々親の振るまい方にもよるが、“有事”におけるその一体的・相補的行動を有効にするのである。

（『児童心理』42・11 一九六八年）